

宇木汲田貝塚 : 1966・1984年発掘調査の再整理調査 報告書

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院 : 学術研究員

高宮, 広土
鹿児島大学総合科学域総合研究学系 : 教授

上條, 信彦
弘前大学人文社会科学部 : 教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/4372000>

出版情報 : 2021-03-25. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン :
権利関係 :

第8章 宇木汲田貝塚から出土した動物遺存体

松崎哲也・菊地大樹

1. はじめに

本章では、1984年の宇木汲田遺跡の発掘調査で出土した動物遺存体のうち、水洗選別により採集された資料の同定結果について報告する。貝類に関しては第7章にて報告されているため、そちらを参照いただきたい。

宇木汲田遺跡では、これまでの発掘調査によって刻目突帯文土器単純期と弥生時代前期の貝層が検出されており、マガキを主体としてハマグリ、ウミナ、フトヘナタリなどが出土している（小田ほか1982、田崎1986）。今回分析をおこなった資料は、一部板付I・夜臼式土器を共伴する遺物包含層（VII層）を含むものの、大部分が刻目突帯文土器単純期（IX・X層）の貝層から出土したものである。動物

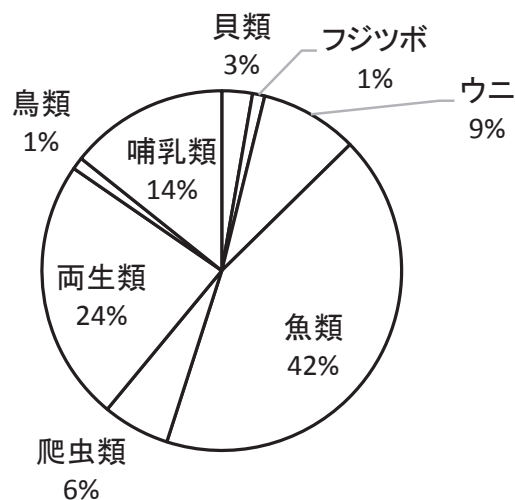


図69 動物遺存体の組成 (n=182)

遺存体は、2mm、1mm、0.5mmメッシュのふるいを使用して採集されており、小型の魚類やカエル類などを中心とする。種同定には奈良文化財研究所の環境考古学研究室が所蔵する骨格標本を使用し、肉眼および実体顕微鏡により形態的特徴を比較観察した。原則として、魚類は関節部、鳥類・哺乳類・爬虫類・両生類は骨端部が残存するものを分析対象とした。ウニ類とフジツボ類については破片すべてを算定した。なお、送付資料中に貝類がわずかに含まれていたため、それらについても分析対象とした。種名及び生態の記載にあたっては、西村編（1995）、日高監修（1996）、阿部監修（2008）、日本鳥学会編（2012）、中坊編（2013）、奥谷編（2017）を参照した。

2. 同定結果

出土した動物遺存体は、破片点数（NISP）で182点、計25分類群にのぼる。内訳は、貝類5点、フジツボ類2点、ウニ類16点、魚類77点、爬虫類11点、両生類43点、鳥類2点、哺乳類26点である（表11）。以下では分類群ごとに詳述する。

1) 貝類

マガキ 左殻1点を同定した。

マルスダレガイ科 左殻と右殻が2点ずつ、計4点を同定した。アサリの可能性が高いが、状態が悪かったため科での同定に留めた。

2) フジツボ類

フジツボ亜目 殻板を2点同定した。種の特定には至らなかった。小片であり、マガキなどの貝に付

表11 宇木汲田貝塚出土動物遺存体種名表

軟体動物門 Mollusca	両生綱 Amphibia
二枚貝綱 Bivalvia	カエル目 Anura sp.
マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	
マルスダレガイ科 Veneridae sp.	爬虫綱 Reptilia
	ヘビ亜目 Serpentes sp.
節足動物門 Arthropoda	スッポン <i>Palodiscus sinensis</i>
顎脚綱 Maxillopoda	
フジツボ亜目 Balanomorpha sp.	鳥綱 Aves
	キジ科 Phasianidae sp.
棘皮動物門 Echinodermata	
ウニ綱 Echinoidea sp.	哺乳綱 Mammalia
	ネズミ科 Muridae sp.
脊椎動物門 Vertebrata	ニホンザル <i>Macaca fuscata</i>
軟骨魚綱 Chondrichthyes	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
板鰓亜綱 Elasmobranchii sp.	イノシシ属 <i>Sus</i> sp.
硬骨魚綱 Osteichthyes	
ウナギ属 <i>Anguilla</i> sp.	
ニシン科 Clupeidae sp.	
コイ科 Cyprinidae sp.	
ボラ科 Mugilidae sp.	
アジ科 Carangidae sp.	
ブリ属 <i>Seriola</i> sp.	
タイ科 Sparidae sp.	
クロダイ属 <i>Acanthopagrus</i> sp.	
ベラ科 Labridae sp.	
アイゴ属 <i>Siganus</i> sp.	
サバ属 <i>Scomber</i> sp.	
ハゼ科 Gobiidae sp.	

着したものが遺跡内に持ち込まれ、廃棄されたと推測される。

3) ウニ類

ウニ綱 棘を16点同定した。いずれも小片であったため、種の同定には至らなかった。殻板や口器などは出土していないが、おそらく食用とするために殻ごと持ち込まれたと考えられる。

4) 魚類

板鰓亜綱 エイ・サメの仲間である。椎骨、楯隣を1点ずつ、計2点を同定した。標本との比較ではエイ類に似た特徴が認められた。

ウナギ属 椎骨を2点同定した。体長50cm以下と推定される。

ニシン科 マイワシ、コノシロ、サッパなどが含まれる。サバ属に次いで多く出土した。すべて椎骨で計10点を同定した。体長10cm程度のものや、それ以下のサイズも認められる。

コイ科 椎骨を1点同定した。体長20~30cmと推定される。

ボラ科 ボラ、メナダなどが含まれる。椎骨を2点同定した。体長20cm以下と推定される。

アジ科 マアジ、ムロアジなどが含まれる。椎骨2点、主上顎骨(左)、角骨(左)、方骨(右)、稜隣が1点ずつ、計6点を同定した。体長は20cm前後と推定される。

ブリ属 椎骨1点を同定した。体長20cm以下の小さい個体である。

タイ科 マダイ、チダイ、クロダイなどが含まれる。方骨(右)、肩甲骨(右)、後側頭骨(左)、尾椎が1点ずつ、遊離歯が3点、計7点を同定した。また、この他にタイ科と思われる鋤骨が1点含ま

れていた。

クロダイ属 前上顎骨（左1右1）2点を同定した。うち1点は熱を受けて黒色に変色している。体長は30～40cmと推定される。

ベラ科 椎骨を1点同定した。体長20cm以下の小さい個体である。

アイゴ属 椎骨を1点同定した。熱を受けて白色に変色している。体長は約20cmと推定される。

サバ属 魚類の中で最も多く出土しており、主上顎骨（左2右1）3点、前上顎骨（左）2点、舌顎骨（左1右1）2点、椎骨5点、計12点を同定した。体長は20～30cmと推定される。

ハゼ科 本科には内湾、汽水域から河川の中・上流域に生息するものまで多様な種が含まれる。サバ属に次いで多く出土しており、前上顎骨（左1右1）2点、椎骨8点、計10点を同定した。体長10～15cmと推定される。

5) 両生類

無尾目（カエル目） 肩甲骨（右）1点、上腕骨（左）5点、橈尺骨（左5右7）12点、寛骨（左1右2）3点、大腿骨（左？）1点、脛腓骨（左4右1）5点、椎骨8点、尾骨2点、また踵骨、距骨と思われるものがそれぞれ3点ずつで、計43点を同定した。なかには同一個体に由来すると思われる骨格部位がまとまって出土したものもある。遺跡の堆積過程の検討から、周辺が沼地状であったこと、人による廃棄行為と自然堆積が繰り返されていたことが指摘されており（田崎1986）、人が積極的に利用したというよりも周辺に生息していたものが偶然貝層内に堆積した可能性が高いと思われる。

6) 爬虫類

ヘビ亜目 肩甲骨（左）1点、椎骨8点、計9点を同定した。種の特定には至らなかった。ヘビに關してもカエルと同様に人為的に廃棄されたものではない可能性がある。

スッポン 上腕骨（左）、椎骨を1点ずつ、計2点を同定した。

7) 鳥類

キジ科 大腿骨（右）を1点同定した。ウズラに近いサイズである。

不明鳥類 趾骨が1点出土しているが、種の特定には至らなかった。

8) 哺乳類

ニホンザル 第四中手骨（右）を1点同定した。

ネズミ科 全身の各部位が出土しており、計15点を同定した。比較的まとまって出土しており、骨端部の癒合状態も一致することから、周辺に生息していたものが貝層内に埋積したと考えられる。

ニホンジカ 左側の切歯（I1・I3）が2点と、中足骨が1点出土している。中足骨は骨幹部前面の破片であり、明確な加工痕は認められないものの、骨角器製作の際に生じた廃材の可能性が考えられる。

イノシシ属 上顎骨破片、下顎犬歯、第四中手骨（右）が1点ずつ、基節骨が2点、計5点を同定した。日本国内におけるイノシシの家畜化、すなわちブタの飼育は弥生時代にはじまるとされているが（西本1991、1992など）、形態による野生種と家畜種の判別は難しいことから、ここではイノシシ属として報告する。今回見つかった資料は、いずれも刻目突帯土器単純期からの出土である。なお、1966年の調査ではイノシシの頭蓋骨が炭化米とともに出土しているほか（小田ほか1982）、本報告と同じ1984年の調査では、「豚の下顎骨を用いた搔器」が見つかったことが報告されている（春成1999）。

3. 骨角製品

器種不明の骨角製品が1点出土した（図70）。大型哺乳類（ニホンジカまたはイノシシ）の肋骨を薄い板状に加工しており、著しく湾曲している。表面には細かい擦痕が多数認められる。一部破片が欠損していたためにすべて接合することはできなかったが、最大長は150mm程度と推定される。

肋骨は緻密質が薄く、製作可能な器種が限定されることから、骨角製品の素材として利用されることは少ない。類例として、鳥取県の青谷上寺地遺跡から肋骨製の簪が出土している（北浦ほか2001）。肋骨を薄く加工し、先端を尖らせている点は本資料と同様であるが、2本が糸で束ねられた状態で出土しており、緊縛部は赤で彩色されている。片側面に糸が巡らないことから、本来は3本以上であったと推測されている。

本資料には複数本を緊縛したような痕跡は認められず、単独で別の目的に使用された可能性も考えられる。したがって、青谷上寺地遺跡のように簪とは断定できないため、ここでは器種不明として扱うこととした。

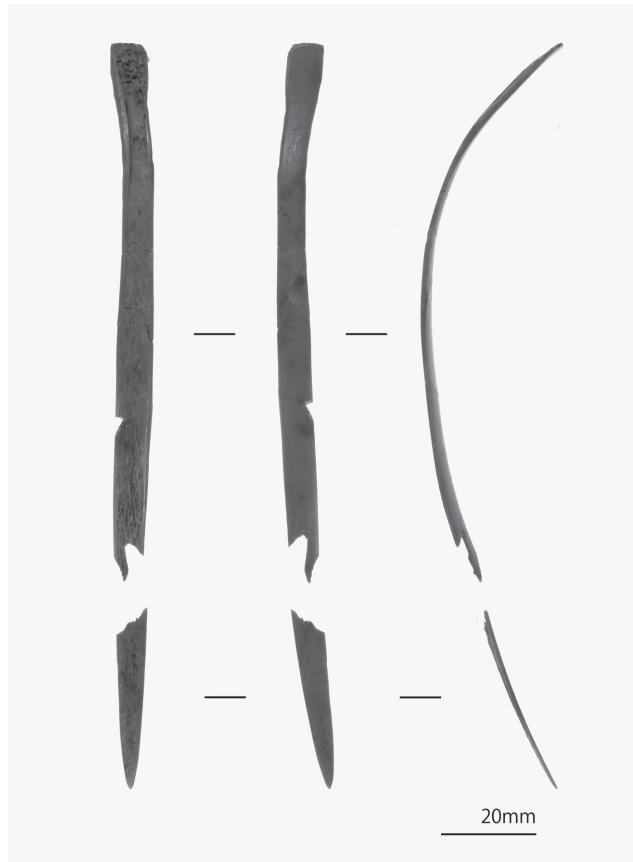


図70 器種不明骨製品

4. 宇木汲田貝塚における動物利用

宇木汲田遺跡では、これまでに1966年度の日仏合同調査で出土した動物遺存体が報告されており、イノシシ属が多く出土したことが指摘されている（小田ほか1982）。今回分析をおこなった資料は、水洗選別により採集されたものであるため大型の哺乳類は少なく、魚類や両生類が中心であった（図69）。ただし、カエル類やヘビ類などは人為的に廃棄されたものではない可能性がある。そのため、以下では出土魚類を中心に宇木汲田遺跡における動物利用について考察をおこなう。

魚類のうち、最も多く出土したのはサバ属であり、次いでニシン科、ハゼ科、タイ科（クロダイ属含む）、アジ科と続く。生態を考慮すると、サバ属、ニシン科、アジ科などの主に沿岸から沖合を回遊する魚種と、クロダイ属、ボラ科、ハゼ科などの内湾や汽水域に生息し、周年にわたって大きな移動はおこなわない定住性の魚種が含まれている。また、点数は少ないがウナギ属やコイ科が出土していることから、淡水域における漁撈活動も想定される。1966年度の調査ではサメ類、アジ科、サバ科、タイ科、イサキ科が出土しており、今回の分析結果に近い傾向を示している。漁撈具に関しては、宇木汲田遺跡からは出土していないものの、隣接する柏崎貝塚や菜畑遺跡から漁網錘が出土している（唐津湾周辺遺跡調査委員会1982）。したがって、沿岸域から淡水域までの多様な水域環境において小

型回遊魚や定住性魚類を対象とした、網漁等による漁撈活動がおこなわれていたと考えられる。

哺乳類はネズミ科を中心としてイノシシ属、ニホンジカ、ニホンザルが出土したが、少量であったために詳細な検討はできなかった。ただし、1966年度の調査では最小個体数でイノシシ属が10個体、ニホンジカが3個体、イヌとニホンザルがそれぞれ1個体ずつ出土している。西日本の弥生時代遺跡では、縄文時代に比べてイノシシ属の占める割合が高く、稲作農耕の受容に伴い家畜利用が増加したことが指摘されており（西本1997）、宇木汲田遺跡から炭化米とともにイノシシ属が出土し、その数が増加する現象は、北部九州における稲作化の受容過程を考えるうえでも、注視すべきであろう。

5. まとめ

今回分析した動物遺存体は水洗選別により採集された魚類や両生類などを中心とし、狩猟活動や家畜利用に関しては検討の余地が残されるものの、宇木汲田遺跡における動物利用の一端を明らかにすることができた。宇木汲田遺跡は縄文時代から弥生時代への過渡期にあたる遺跡であり、当該時期における動物利用を解明する上で重要な資料である。

謝辞

青谷上寺地遺跡出土の肋骨製簪については、鳥取県教育文化財団の河合章行氏にご教示いただいた。記して御礼申し上げます。

引用文献

- 阿部永監修2008『日本の哺乳類 改訂2版』東海大学出版会
奥谷喬司編著2017『日本近海産貝類図鑑 第二版』東海大学出版部
小田富士雄・賀川光夫・永井昌文・田中良之1982「宇木汲田貝塚」『末廬国－佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究－』六興出版、135-178頁
唐津湾周辺遺跡調査委員会1982『末廬国－佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究－』六興出版
北浦弘人・鬼頭紀子・湯村功・高尾浩司・井上貴央・古川郁夫2001『青谷上寺地遺跡3』財団法人鳥取県教育文化財団
田崎博之1986「唐津市宇木汲田遺跡における一九八四年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』31、1-58頁
中坊徹次編2013『日本産魚類検索 全種の同定 第三版』東海大学出版会
西村三郎編著1995『原色検索日本海岸動物図鑑 [II]』保育社
西本豊弘1989「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』大分県教育委員会、48-61頁
西本豊弘1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』36、175-194頁
西本豊弘1992「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡 II』大分県文化財調査報告書第89輯、大分県教育委員会、92-110頁
日本鳥学会編2012『日本鳥類目録 改訂第7版』日本鳥学会
春成秀爾1999「下顎骨製搔器－獣皮の加工具について－」『国立歴史民俗博物館研究報告』77、1-38頁
日高敏隆監修1996『日本動物大百科 第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類』平凡社